

『桑原隲蔵全集』(岩波書店、昭和43年)

から学ぶこと

明治末から大正を経て昭和初年に至る間、東洋史学界の巨星として輝いていた桑原隲蔵の全集が岩波書店から出版されたのを機会に、その書評をせよという注文である。桑原は明治29年(1896年)7月、帝国大学文科大学校漢学科の卒業であり、わたくしはその後身ないし分身ともいうべき東京大学文学部東洋史学科を、昭和23年(1948年)9月に卒業している。その間には約半世紀の開きがあり、桑原とわたくしとは祖父と孫ぐらいの年齢の差がある。むろん桑原に会ったこともないから、桑原の風貌については、桑原を直接師と仰いで学を成した全集各巻編纂者の「解説」や「月報」の文章などから推察する以外はない。また桑原がその生涯を通じて開拓した各方面の研究業績は、それぞれの専門分野を継承した研究者によって適正に評価されるであろう。となると、わたくしのような立場の者に残された書評の道は何か。

それは、桑原の実動30余年にわたる研究生活のもつ意味を、そのプラスとマイナスの面をあわせて検討し、それを通じて、現在アジア研究に従事しているわれわれに、それがいかなる問題を投げかけているかを反省する以外にないだろう。桑原が東洋史学の稀有の天才であり、その業績が、東の白鳥庫吉と並ぶ偉観を成していることは、わたくしが強調するまでもない事実である。しかし全集の「解説」や「月報」の一部執筆者に見られるような、たんなる桑原への追慕景仰やこじつけの弁護論だけでは、現在に生きる研究者としては怠慢の誘いを免れないのではないか。桑原がその全生涯をこめて築きあげた業績自体が、どういう歴史の意味をもつかを検討することこそが、実は先師の遺訓をよりよく生かす道であろう。

こういうわたくしの桑原論は、おそらく、桑原を師と仰ぐ人々からは、青二才が何を見当ちがいな野暮な文句を並べるか! と嘲笑されるかもしれない。あるいは東洋史学の「聖域」を冒瀆するもの、と憤激を買うかもしれない。しかし、もしそういう反感を持つ人がいたとしたら、そういう種類の反感こそが実は問題なのだ、と敢て言おう。桑原の論文に特徴的なのは、東西の史料にわたる博搜と、堅実な批判にもとづく「山の如き」断案である。わたくしのもとよりその努力と明晰さには敬服するが、このたび『全集』に収録された桑原の論文を通読

しているうちに、かれの学術上の業績の高さを問題にするだけで済まぬものをしきりと感じた。それは「元時代の蒙古人」と題する講演筆記(『全集』第I巻、以下Iと略記)に見られる、桑原のユーモアあふれる話しぶりのことなどを言っているのではない。むしろ、桑原が研究生活を続けた、1895年から1930年ごろまでの歴史状況の中で、桑原はアジアの中から何を研究課題としてえらび出し、それを精力的に追究し、かつどのような意味をそれに与えていたか、を総合的にとらえねば、現在において意味のある桑原論は成り立たぬことを感じたのである。

『桑原隲蔵全集』を今の時点で出版したことは、編纂者や出版社の意図をあるいは超えて、日本におけるアジア研究の姿勢を反省させる契機となったし、またなるべきものだ、とすくなくもわたくしは考える。

※

全集に載ったうちで、最も早い日付の論文は、「祖徠の学案を論ず」(1895年、I)である。これは雑誌類に公表されていないから、桑原の漢学科在学中のリポートかもしれないが、孔子の学は政治学なりとする祖徠の説を反駁して、内的な修身の学こそが孔子の本来の立場であったことを論じたものである。この青年桑原に見られる儒教理解の姿勢は、30年をへだてた晩年の「支那の孝道」(1928年、III)に、はるかに呼応しているように思うが、そのことは後で問題にしよう。桑原が漢学的な勉強をした足跡は、その他「三皇五帝の名称に就き」(1896年、II)、「支那古代の祭祀に就き」(1896年、I)の諸論文に示されている。とくに後者は、卒業直後の『史学雑誌』7巻11、12号に連載されているところを見ると、桑原の卒業論文であつたらしい。

桑原の基礎はこのように漢学にあったが、しかしかれはいわゆる漢学にははまり切らぬ視野の広さをもっていた。卒業論文を書いた年の3月に、「支那の太古に関する東洋学者の所説に就き」(I)を『国民之友』に寄稿しているのは、そのあらわれである。桑原はそこで、支那人や支那文明がエジプト・西アジアから伝来したというラクーベリーらの説を斥けているが、支那文明をユーラシアの東西交流の中に位置づけようとする、後年の桑原の基本的関心が、すでにそこに端緒的に展開されていることは注目し値しよう。むろんそこでの桑原の中国の文献史料の扱いは甘く、また支那人種はかつてタリム盆地に居住したと仮定するリヒトホーフエン説に賛意を表する点などは、現在からは問題にもならない。しかし明

治20年代の日本の学界……とくに漢学界……を背景においてこの論を考えれば、その着眼の斬新さは十分に評価しなければならない。

翌1897年発表された「支那学研究的の必要」(Ⅰ)は、桑原の抱負をより体系的に展開した文章である。過去3000年間、中央アジアは人類社会の発達に一大関係をもってきた。その中央アジアの沿革を明らかにするためには、“殆ど唯一の灯光たる支那の書類”を研究せねばならぬ。しかるに、その点については近年の欧州のほうが、いちじるしく研究が進んでいるのはどういうわけか。“我国の漢学者が温故の重んずべきを知りて知新の要を忘れ、支那学の研究を挙げて欧州人士の手裏に帰せしむるが如き、失体を來たすことなからんことを望むや切なり”(621ページ)。漢学をたんなる漢学に終わらしめず、むしろ人類文化の基本問題……中央アジアの文化交流……の理解に役立たせねばならぬ、という桑原の提言は、思えば以後30年にわたる研究テーマを、かれ自身に課したものであった。

こういう問題意識は、たんに桑原一個人のものではなく、明治末年から独立しはじめた東洋史学なる学問に流れる、基礎的な論理でもあった。現にわたくしでさえも、大学時代の教授や先輩の口から“西域の研究がだいじだ”とか、“日本の東洋史学は世界一流だ”といった類のことを、たえず聞かされてきた。ただし、桑原にあってはかれの学問の基礎であり核でもあった〈漢学〉が、ここでは欠落して、いわば〈漢学抜き〉の東洋史学に堕していたことが、決定的な違いであった。

※

卒業後、大学院に在学中の桑原は、「高等師範学校教授・文科大学講師」の那珂通世の校閲のもとに、『中等東洋史』(Ⅳ)をまとめあげた。那珂の提議にもとづいて中等学校に東洋史の科目が設けられ、文部省から教授要領が発表されたのは1894年のことだが、その内容は、第4巻「解説」によると、

1. 中国を中心とする東洋諸民族の盛衰興亡
2. 東西両洋の交通交渉
3. 我が国と東洋諸国との関係

を含むものであったという。このうち、とくに2の項目などは、中央アジアの研究を日本人学者の責務とする上述の桑原の考え方に、まさに適合するものである。むしろ桑原の考えには、文部省の教授要領に盛りこまれた(と思われる)那珂の主張が深い翳を落としているように思

う。那珂=桑原の関心に沿った教授要領にもとづいて、那珂=桑原が執筆すれば、これは“名著”となるのが当然であろう。『中等東洋史』が発行されたのは1898年3月だが、その年8月に、桑原は三高教授として東京を去った。しかし翌年9月には、高等師範学校教授として東京にもどり、那珂の同僚となっている。那珂と桑原との師弟間の交情は、「那珂先生を憶ふ」(Ⅱ)という追悼文に明らかかなように、1908年に那珂が死ぬまで変わらなかった。

1906年11月から2年間の中国留学をへて、1909年4月に京都帝国大学史学科教授に迎えられるまでの、30歳台の桑原は、東西の文化史的交流のあとを、厳密な資料操作によって固める論文を積み重ねている。その中には、宗教の伝播を扱ったものが比較的多い。

- 1898年 鉄木貞とコロムバスと(Ⅰ)
- 1899年 釈迦牟尼出生年代考(Ⅰ)
- “ 北方仏教研究の価値(Ⅰ)
- 1900年 明の龜天寿よりローマ法皇に送呈せし文書(Ⅱ)
- “ 明清時代に於ける支那滞在の耶蘇教士(Ⅱ)
- 1901年 仏教の東漸と歴史地理学上に於ける仏教徒の功勞(Ⅰ)
- 1908年 入竺求法の僧侶(Ⅱ)
- 1910年 高岳親王の御渡天に就いて(Ⅰ)
- “ 老子化胡経(Ⅰ)
- “ 釈尊の降誕地(Ⅰ)
- “ 大宝令と唐制(Ⅲ)
- 1911年 紙の歴史(Ⅱ)
- “ 創建清真寺碑(Ⅱ)

40歳台にはいつて京都大学教授となってからの桑原は、時事に関してやや発言の幅をひろげはじめる。時あたかも隣国中国は、辛亥革命から中華民国の成立へという激動期にあった。「支那の革命」と題する文章(1912年1月1～2日、『朝日新聞』、1)は、革命軍の檄文類に解説を加えたものである。たとえば、そこで使われている「黄帝紀元」とは何か、「種族革命論」にはどういう歴史的背景があるか、等々。また「支那人弁髪(鬚)の歴史」(1912年2月、『芸文』、1)では、中国における弁髪(鬚)の由来、とくに清朝時代における弁髪強制の歴史を解説している。こういう種類の文章は、博識の桑原にとっては余技のまた余技に属したであろう。中国問題に関する時事評論は、その後も「支那人の文弱と保守」(1916年、1)、「支那の国教問題」(1917年、1)と続くが、その論調は1919年あたりを境として変調をきたすように思う。

このことは、あとで問題にしよう。

こういう時事的発言よりも、桑原の本領はむしろ東西交通史の研究にあった。「大宛国の貴山城に就いて」(1915年, III)および「張騫の遠征」(1916年, III)の投じた波紋は、大宛国の貴山城の位置をめぐる白鳥庫吉、藤田豊八の反論をよび、これに対して桑原は再び「大宛国の貴山城に就いて」(1916年, III)で論じ返した経緯は、あまりにも東洋史学界では有名である。桑原はまた、この陸上交通路とならんで海上交通路にも検討を進め、のちに『蒲寿庚の事蹟』(V)として結実する諸論文を1915年から17年にわたって『史学雑誌』に発表したほか、それに関連して、「ペルシア湾の東西貿易港に就いて」(1916年, III)、「カンフウ問題殊にその陥落年代に就いて」(1919年, III)、「イブン・コルダードーに見えたる支那の貿易港殊にジャンフウとカンツウに就いて」(1919~20年, III)などの力作を次々と発表している。

桑原の最も充実した時期のこれら代表的業績について、その内容を紹介批評する能力がわたくしにないのは残念だが、それらは、一部を読んだだけでも、多くの人が評するように、博引旁搜、しかも一点一点一画をもゆるがせにしない精緻な考証の連続であることがわかる。個々の考証の当否については、専門分野の後継者が判定することで、わたくしの任ではない。ただ言えることは、近代ヨーロッパ人の東洋研究に対するライヴアル意識を燃やしつつ、しかもそのヨーロッパ東洋学の方法を積極的に摂取して、力いっぱい成長した日本東洋史学の、いわば極限的な結晶がここにある、ということである。そういう健康な、気力に満ちた業績に対し、わたくしは素直に頭を下げる。

※

桑原の論文は、読みこめば読みこむほど圧倒される。注の一つ一つまで、実に力がこもっていて、寸分の隙もない。しかるに、そのような堅確無比な桑原の論文を読みつつも、時に空虚感が襲ってくるのは、どういうわけだろうか。

1919年に桑原は「支那人の食人肉風習」(I)という小篇を、『太陽』に寄稿している。この年4月27、28日の新聞に、ロシアの首都ペトログラードで人肉を販売していた支那人が銃殺された、と外電が報じたのを見て、“端なくも、古来支那人間に行はるる、人肉食用の風習を憶ひ起さざるを得な”くなったのが(454ページ)、桑原がこの一文を草した動機であったらしい。この時に得たテ-

マを骨子として、古今にわたる史料を博引旁搜して完成したのが、それから5年後『東洋学報』に発表した学術論文「支那人間に於ける食人肉の風習」(1924年, II)であった。桑原の論文は、南北支那の問題にしても、蒲寿庚の問題にしても、はじめの発見ないし着想を骨子として、それに膨大な傍証の厚みをつけていく形で〈完成〉されていく点に特色がある。

ところが、こういう過程で〈完成〉された「支那人間に於ける食人肉の風習」なる論文を読んでいくと、凄惨目を蔽わしめるような史料の連続につよく魅きこまれる反面、こういう食人肉史料を数年にわたって漁りつくした桑原の執念に、ふと嫌悪を感じるのは、わたくしのたんなる感傷だろうか。桑原自身はこの論文をまとめた目的を、“日支両国は唇齒相倚る間柄で、勿論視善でなければならぬ”が、“支那人をよく了解する為には、表裏二面より彼等を観察する必要がある。……食人肉風習の存在は支那人にとって余り名譽のことはない。されど儼然たる事實は、到底之を掩蔽することを許さぬ”(II, 204ページ)ということばで説明しているが、1924年の時点で食人肉の風習の存在を“掩蔽”することが、はたしてそれほど“支那人をよく了解する”妨害になったかは疑問である。博引旁搜の厚い壁が、かえって白々しく感じられるのは、そのためだろう。

1925年の「歴史上より観たる南北支那」(II)と題する論文も、10年前の「晋室の南渡と南方の開発」(1914年, I)の着想を軸として、それに膨大な注を加えて完成した〈名論文〉と言われる。明快な論旨の本文と、それを上まわる量の注とによって構成される桑原論文のスタイルは、しばしば学術論文の模範とされる。その明晰な分析からわれわれの受ける恩恵は数多くあることは事実だが、これが論文の典型だと言われると疑問なきをえない。「歴史上より観たる南北支那」の形式を押しつめていくと、1926年の「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」(II)のように、100ページ近くが、すべて小項目の羅列によって埋められるところまでいきつくのは、むしろ当然な気がする。そこでは本文すらが廃棄され、注そのものが本文になってしまっている。しかしこれがはたして正常な論文のスタイルと言えるだろうか。

はじめに立てた論旨を、その後の傍証によって固めに固めていく。こういう研究方式を採れば、論文の精密度が高くなっていくのは当然だろう。「宋末の提挙市舶使西域人蒲寿庚に就いて」(『史学雑誌』, 1915~18年まで5回にわたって分載)に出発して、『宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』(東亜攷究会版, 1923年)を経て、

死後刊行された『唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況殊に宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』（岩波書店刊、1935年）へと完成度を高めていく桑原の研究の足どりについては、第5巻の「解説」に詳しい。こういう研究態度をこそ、学術に忠実なものと言うべきなのだろう。しかしその反面、わたくしは、全241ページ中、「本論」が18ページ、あとはすべて「参照」計142項目で占められているという『全集』の依拠した岩波版の形式は、やはり正常な論文体ではないと思う。それはおそらく、数学が得意だったという桑原の、自己の合理的思惟への断乎たる自信がさせたものだろうが、実は桑原の誇るその合理性にも、合理性に徹するがゆえの盲点が逆に生じていたことを指摘しなければならないのである。

※

さきに挙げた「支那人弁髪（べんぱつ）の歴史」という論文で、桑原は弁髪（べんぱつ）の歴史を調査しつつ、弁髪（べんぱつ）の強制に対して抵抗した漢人が、これまで数百万人も死んできたことに触れ、それを“世界稀覯（きこう）の奇現象”と評している（I, 452ページ）。しかし、漢人が髪（かみ）の形にこだわったのには、それ相応の理由があったからである。纏足（ちんそく）や食人肉（じくにく）の風習（ふうじゆつ）（?!）にしても、たんに“世界稀覯（きこう）の奇現象”として片づけてはしまえない、深くよんだ旧中国の歴史状況というものがあつたはずである。ところが、そういう中国の社会やそこに住む人間のもつ苦悩に対しては、桑原はほとんど関心と理解を示そうとしていないように見える。すくなくも、そこには、中江丑吉（なかえしきち）や鈴江言一（すずえいごんいち）に見られるような、苦悩する中国と共に苦悩するという姿勢は見当たらない。

その点では、京都帝国大学史学科の同僚であつた内藤湖南（うちとうこくぶん）とも桑原は異なっている。桑原は〈支那学〉ということばを嫌ったそうだが、内藤の方法にそれとなく批判を加えている文章がたしかにある。たとえば梁啓超（りやうきせう）の『中国歴史研究法』を高く評価した文章（1922年、I）の中で、劉知幾（りうちけい）・鄭樵（ていせう）・章学誠（ていがくせい）の因襲（いんじゆ）的な議論から超越することが必要だと言っているのは、明らかに内藤史学への批判である。章学誠（ていがくせい）が推奨（ていしょう）した司馬遷（しまたせん）についても、自分の個性（こんせい）や独断（どくたん）を重んじたために“幾分（いくぶん）史実（しじつ）を犠牲（ぎせい）や手段（しゆん）に供（た）したかと疑（た）はるる形跡（かたじけ）がある”（II, 474ページ）と批評し、“史記（しき）の欠陥（けつかん）として第一（だいいち）に挙（た）ぐべきは、体裁（たいさい）の不整（ふせい）なることなり。……第二（だいに）の欠点（けつてん）はその記事（きじ）に抵牾（ていご）・舛誤（せんご）からざることはなり”（II, 488～489ページ）と論ずる晩年（ばんねん）の「司馬遷（しまたせん）の生年（せいねん）に関する一新説（いしんせつ）」（1929年、II）に至（いた）っては“司馬遷（しまたせん）の粗笨（そぼん）なる頭腦（ずなう）と、豪放（ごうほう）なる筆

致（し）とは、記載（きざい）せざるべからざる事項（じくじやう）——〔小倉注（こくらしゆ）〕たとえば生年（せいねん）——をも省略（しょうりゃく）、明確（めいせつ）とせざるべからざる事項（じくじやう）をも曖昧（あいまい）にして居る”とまで断定（だんてい）する。こうまで言うことは、自己（じこ）の合理性（ごうりんせい）への過信（か）ではないか。

中国（ちゆうごく）に対するこのような桑原（そうげん）の姿勢（しせい）は、大正（たいしやう）中期（ちゆうき）以降（いこう）の時事（じじ）評論（びろん）の中（なか）にも露骨（ろこつ）にあらわれてくる。五四（ごし）運動（うんどう）直後（ちかご）に書（か）かれた「対支（たいし）政策（せいさく）管見（くわんけん）」（1919年（しやうねん）8月（ごうげつ）、I）では、北清（ぺいせい）事変（じへん）の賠償（ばいしょう）金（きん）や山東（しやんと）利権（りけん）の返還（へんたん）のような“小惠（せうゐ）（?）”では、日支（にっし）の親善（しんぜん）は期待（きたい）できない、支那人（しやなじん）が日本（にっぽん）を排斥（へいし）し猜忌（さいき）するのを止めさせるのが先（ま）だ、と言う。そして“支那人（しやなじん）の感情（かんじやう）を害（がい）するのを恐（おそ）れて、正当（せいじやう）なる抗議（くわんぎ）や要求（ごうきよう）——〔小倉注（こくらしゆ）〕日貨（にっか）排斥（へいし）への抗議（くわんぎ）のこと——を遠慮（えんりよ）遅疑（ちぎ）する理由は毫（こ）もない”（I, 61～62ページ）と主張（しやうけん）している。「国際（こくさい）間の驕（きやう）況（きやう）としての支那（しやな）」（1927年（しやうねん）10月（じゅうごうげつ）、I）では21カ条（じゅういちかじょう）要求（ごうきよう）も“当時（たうじ）の事情（じやうけい）と日本（にっぽん）の立場（たてかた）から公平（くわんぺい）に観（かん）て、世間（よ）間で騒（さわ）ぎ立て（た）てる程（ほど）苛酷（かこく）な要求（ごうきよう）と思（おも）へぬ”（88ページ）し、近年（きんねん）支那人（しやなじん）の国権（こくけん）回復（かふく）運動（うんどう）が激化（げきか）したのは、“世界（せかい）大戦（たいせん）後（ご）、米（べい）国（こく）がパリ（ぱり）会議（ぎぎ）やワシントン（わしんとん）会議（ぎぎ）で、支那（しやな）に対して採（た）った機嫌（きげん）取り（とり）政策（せいさく）が、支那（しやな）国民（こくみん）を増長（ぞうちやう）させた”（86ページ）ためだと論（ろん）ずる。だから問題（もんだい）は、へたに日本（にっぽん）側（がわ）から理解（りかい）の手（て）をさ（さ）し（べ）るることによつては解決（げっかい）せず、“支那（しやな）国民（こくみん）にとっては、反省（はんせい）自制（じせい）が一番（いちばん）緊要（きんやう）”だ、という1929年（しやうねん）の「日支（にっし）の共存（こくぜい）共榮（きやうりやう）に就（き）いて」（I）の言（こと）に帰（か）着（しやく）するのである。

1920年代（じゅうにじゅうねんだい）の桑原（そうげん）の時事的（じじてき）発言（はつげん）が、時（とき）の日本（にっぽん）政府（せいふ）の中国（ちゆうごく）政策（せいさく）にきわめて近い（ちか）ことを批判（ひはん）するのはたやすい。わたくしはそのことをあげつらうために、あれこれ引用（いんよう）を続けてきたわけではない。わたくしがむしる問題（もんだい）にするのは、第1巻（だいいちくわん）の「解説（かいせつ）」を担当（たうたん）した編纂者（へんさんしや）の1人（ひとり）が、“桑原（そうげん）先生の……立場（たてかた）は反中国（はんちゆうごく）主義（しやうぎ）にとられやすいけども、これは皮相（ひさう）な読み方（よみかた）だと思われる”として、“今（いま）にして思う（おもう）と、じっさいは、桑原（そうげん）先生（せいしん）の場合（ばあひ）もじつは本質（ほんしつ）的には中国（ちゆうごく）主義（しやうぎ）であつたのである”と書（か）いている点（てん）である。いったい“本質（ほんしつ）的には中国（ちゆうごく）主義（しやうぎ）”とはどう（どう）いうことなのか。この解説者（かいせつしや）は、桑原（そうげん）が漢学（かんがく）科（か）の出身（しゆしん）で漢詩（かんし）をつくり、漢文学（かんぶんがく）に対する理解（りかい）力（りき）も深い（ふかい）ことをもつて〈中国（ちゆうごく）主義（しやうぎ）〉としているようだが、そう評価（ひやうか）することによって桑原（そうげん）の業績（しゆげき）に現代（ごんたい）的（てき）意義（いぎ）が生（な）ずるとでも思（おも）っているのだろうか。そうだとしたら、これほど見事（みごと）に桑原（そうげん）の本質（ほんしつ）をずれた“皮相（ひさう）な読み方（よみかた）”はないだろう。

かつてわたくしは『文学博士（ぶんがくはくし）桑原（そうげん）隴藏（りやうざう）著（しよ）支那（しやな）の孝道（きやうだう）』なる小冊子（せうさふし）を古本屋（ふるほんや）で見つけて、一晚（いちばん）読み通（とお）した記憶（きおく）がある。主旨（しゆし）は中国（ちゆうごく）刑法（けいふ）の家族（かぞ）主義（しやうぎ）的（てき）傾向（けんきやう）をアカデミック（academic）に論（ろん）じたものなのだが、たとえば注（しゆ）13に昭和（しやうわ）2年（に）6

月の『週間朝日夏季特別号』掲載の“網野菊子とかいう女性作家”が書いた、家族内のいがみ合いを主題にした小説の内容を紹介して“兎に角、私はこの小説に就いて、可なり悲憤を感じた事実を、茲に附言して置く”と書いてあるのを読んでひどく愉快な気がしたので覚えている(『全集』ではⅢ, 82ページ)。本文と注とのアンバランスさが、一種のたくまざるユーモアを生み出しているからだろう。こういう雰囲気、わたくしはとくに理由もなく〈明治〉という時代を感じて、なつかしくなる。

しかし、そのなつかしさに浸ってばかりおれぬのが、現実のわれわれではないか。1928年2月に発表されたこの論文、正式には「支那の孝道殊に法律上より観たる支那の孝道」なる論文が、時期的には、まさに上述の中国政策論と平行して書かれていたことをわたくしは見落とすことができない。この論文では、父子を中心とした東洋の縦の家庭と、夫婦を中心とした西洋の横の家庭とが対比され前者にもとづく道徳や政治は、行きづまりつつ

ある“西洋の文化に裨益する所尠くない筈である”(Ⅲ, 71~73ページ)と述べられている。こういう東洋道徳の精華としての孝道の強調が、孝道の本家であったはずの中国への無理解と平行していることを、わたくしは重視したい。さらに突っこんで言えば、中国の現状が桑原の理解の届かぬ彼方に走り去って行くにつれて、逆に孝道への関心が高まってきたと言えるのではないか。徂徠論から出発した桑原が、晩年に孝道の問題に復帰したのは当然かもしれないが、かれをそこまで復帰させたものは、研究対象であるアジアとくに中国の変貌であり、またその変貌をとらえる方法が桑原に欠けていたためでもあった。合理性を過信するかれは、中国の動きを内側から理解する道を自ら拒むことによって、問題を孝道に後退させざるをえなくなったのである。

偉大な東洋史学の開拓者であった桑原隲蔵の生涯からわたくしが学んだことは、ほぼ以上で尽きる。

(学習院大学文学部教授 小倉芳彦)

アジア経済研究所刊行

アジアの経済成長と貿易構造

神戸大学教授 入江猪太郎編
190頁 円 380

▷経済成長と貿易構造(入江猪太郎)▷工業化過程の理論とその検証(片野彦二)▷アジア諸国の経済開発計画(安井修二)▷アジア諸国における輸出変化と貿易構造(三辺信夫)▷アジア諸国の工業化と貿易構造(村上敦)

アジアの第1次商品貿易

一橋大学教授 小島清編
260頁 円 520

▷ドル不足と低開発国問題(小島清)▷第1次商品貿易と共同市場(小島清)▷東南アジア諸国の貿易集中度(相原光)▷米穀経済の国際的安定(逸見謙三) [付録] 文献解題

東南アジア第1次商品の価格安定施策

日本銀行
アジア調査課長 渡辺長雄編
180頁 円 540

▷価格安定化の緊要性(江部貞四郎)▷価格変動要因(内山潤一郎)▷国際商品協定の現状(内山潤一郎)▷その他の安定施策の現状(内山潤一郎)▷価格安定施策の効果と限界(内山潤一郎)▷最近における国際的な補償措置構想(高橋邦年)▷結論(渡辺長雄)

アジア貿易の地位と特質

関西学院大学
教授 片山謙二著
180頁 円 540

▷世界貿易における低開発地域の地位と特質▷低開発地域貿易におけるアジアの地位と特質▷アジアの貿易市場構造の分析▷アジアの商品貿易構造の分析

アジア経済出版会発売